

## 教えちゃだめだったの？（メール）

私の名前はアツコ。勉強も運動もクラスで中くらいのごく普通の中学生。明後日がテストなので今日は部活動がない。放課後にすぐ下校になるから、友達と話す時間もなくすぐに家に帰ってきた。

テストがあるのに全然気が向かない。でも、前回のテストが良くなかったから、今回のテストはがんばらないと。まずは、特に不得意な数学から・・・。

「ここはテストに必ず出る問題だから、なんとかしても解かないと。」

数学の問題集を開いて鉛筆を持ったまま、止まってしまっていた。

「う～、難しいな。この問題わかんない。」

「わかる人から解き方を聞いた方が早いかな。」

最近買ったばかりのケータイを取り出して、「助けてメール」を何人かの友人に出した。



『お願い。数学 10 ページ問 3 の解き方教えて m(\_ \_)m』



《ブルブル》

「あっ、ユウコからのメールだ。さすがユウコ、この問題どうやって解いたのかな？」

そう思いながらメールを見た。ユウコは同じ小学校の出身で同じ部活なので毎日一緒に帰っている。クラスは別でも、部活も勉強も困ったときには頼りになる、何でも話せる友達だ。ケータイを買ってからは毎日メールのやり取りをしている。



『アツコ、問題解けたかな？』

ねえ、聞いて！聞いて！今日、いいことあったんだ＼(^\_^)／』

「エッ！いいことって何？何？」

もう、テスト勉強のことなんてすっかり頭から消えてしまい、すぐに返信を送った。



『何があったの？おしえて？ユウコ！！』



『ヤスシ君っていい人(^o^)]』



『ヤスシ君って(?\_?) ユウコのクラスの人なの？』



『今月の班替えで一緒になった、私の席の右斜め前の人だよ。』



『よく覚えていないな～ ねえ、ユウコ、くわしく教えて？』

ユウコとのメールのやり取りで今日のことが分かってきた。

理科室掃除のゴミ捨てを、いつもはユウコひとりでしているのに、今日は、同じ班のヤスシ君がゴミ箱を持って行ってくれたこと。「明日から順番にしよう」と提案してくれたこと。理科室の鍵を閉めて職員室に返すのもヤスシ君がしてくれたこと。

「ユウコのラッキーを、みんなに教えちゃお。」

私はアツコからのメールを何人かの友人に転送した。



『ヤスシ君って知ってる？いい人らしいね。ユウコがいいことあったんだって。』

あれっ、もうこんな時間。どうしよう、数学の問題集、全然進んでいない。

もう 10 時を過ぎてしまっていた。

次の日、休み時間に教室で友人と話していると、ユウコが突然教室に入ってきて、私の机の前に立って大きな声で話した。

「どうして他の人に教えたの？」

みんなの視線が私たちに集中し、一瞬、クラス内の時間が止まったように感じた。

私は、小さな声でユウコに聞いた。

「あれ、教えちゃダメだったの？」

「何言っているの？アツコ！」

ユウコは怒って教室から出て行ってしまった。

「どうしよう・・・。」

思わずつぶやいてしまった。クラスのみんは、私と視線を合わせるのを避けているように感じた。

「どうして、ユウコを怒らせてしまったのかな」

授業中ずっとこのこととばかりを考えていた。

明日がテストなので今日も放課後には何もない。授業が終わったらすぐにでも帰りたい重い気分だった。

教科書を片付けて帰ろうとしたとき、同じクラスのとモミから話しかけられた。

「アツコちゃん。元気だしなよ。」

「うん・・・。ユウコに怒られちゃったんだ。」

「アツコちゃんが昨日、送ってくれたメールのことだと思うよ。休み時間に来たユウコちゃんすごく大きな声で言ったからね。」

「ねえ、転送しちゃダメだったのかな？」

「あのメール、アツコちゃんだけに読んでほしかったんじゃないかな。」

「メールには、秘密だなんてユウコは書いていなかったよ。」

「でも、私はユウコちゃんから直接メールもらってないよ。」


その言葉で、はっと気がついた。どうして、ユウコは私にしかメールしなかったのか。いつも話している仲間のとモミにも出していないのか・・・。

私は家に帰って、とモミの言葉を思い出しながらしばらく考えた。

「ユウコに悪いことしたなー」

 《ブルブル》

ユウコからメールが来た。私は恐る恐るケータイのメールを見た。

 『アツコ、今日は怒鳴ってごめんなさい。明日くわしく話すから。』

私はユウコに伝えなければならないことは何なのかを考えた。